

〔巻頭言〕

機関誌の年2回発行に寄せて

東京大学

杉下知子

1994年の国際家族年に誕生した「日本家族看護学会」は昨年の第4回学術集会での一般演題58、参加者が780人(延1,000人以上)と、それ以前の2.5倍に急増いたしました。会員数も1998年8月時点で588名に達し、日本学術会議の学術団体として登録申請できる条件を満たすまでに成長して参りました。看護学領域で現在日本学術会議に登録されている学術団体は日本看護科学学会、日本看護研究学会、日本助産学会、日本看護学教育学会、日本がん看護学会の5学会であるとのことで、これらの団体に続いて本年度は登録が実現出来ますことを願っております。

看護(学)の領域として若い家族看護(学)をわが国で育てるには学術団体を組織して取り組むことが最も確実で近道であると本会設立当時考えたのですが、上記のような本学会の発展は、この方針が確かであったことを実証してくれているようです。

この様な発展の中で、昨年の理事・評議員会で機関誌「家族看護学研究」を年2回発行することが提案され承認されました。すなわち第4巻より毎巻2号発行されることとなりますので、会員各位の積極的な投稿を期待いたします。

海外での家族看護(学)の取り組みは、例えばカナダカルガリー大学の家族システム看護、米国の家族

看護専門看護師(FNP)等の先例があります。学術的取り組みとしては1988年に第1回 International Family Nursing Conference がカルガリー大学で開催され以後3年毎に開催されていること、Journal of Family Nursing がカルガリー大家族看護ユニットのBell博士の編集のもとで1955年より年4冊発行されていること、などです。国際的な家族看護学の学術団体はまだ組織されておらず、家族看護(学)の学術団体が組織されているのは日本だけのようです。1999年5月にはフィンランドで The International Family Nursing Research Congress が開催されるとのことです。

第4回日本家族看護学会の一般演題の対象領域は演題数の多い順に小児、高齢者、成人、母性、ターミナル、看護教育、看護職、看護学生、遺族等であり、極めて対象領域が広く、また研究方法でも調査研究、事例研究、質的研究等多様な方法が用いられていました。看護系大学協議会でのCNS領域の「家族看護」の教育内容も実現に向けた検討が進められていると伺っております。本学会の活動がわが国での家族看護(学)の骨格をつくることに貢献することを会員の皆様とともに心から期待申し上げ、巻頭の挨拶いたします。